大野定子詠草大小十六冊の内

たまのこゑ

六

洋学文庫
文庫8
A 180
6

早稲田文庫

おほけなくも

敷島や大和言葉の花もしをりしのまにまにかくされや
我しのまゆ葉をかへうしもいの和歌の葉のおもはかくも
ならひしとおもふ心しまたまた露かすやしたる引にしつ
おほけなくも伝へ来たる道の事をきゝて
露たまきことわへぬ道のまなならひて両道いきにしつ

元日 鶯

心あらん人にしらせと鶯の初音そはしめて春は来にけり

早春 水

きのふまて氷りしかるいまは何の水とさそらきにけり

昭和26年12月10日寄贈
大槻茂雄氏

里初春

うちたくいほりてもるゝ山かけの春は傳ひのとかなるらん
花の香ねに野の舟ねも傳ふすみさきたる春てふきさし
語りいまふかる山の里も春くる初るゝうちとけてさき

松上霞

さ木ゆの春の霞のころ衣松は出し木不変して
あをきまゝ緑春風ふきし山まの霞のきぬを引とめてけり

梅花香

たちはしおるこの宿をはときはほすゑる袖は梅薫るらん
たらの袖のみかつゝ絶えてかる北の梅を風のつたひて

霞添春色

八峰たちやわねをわけしの遠ちま春の色をゆつりてみえし
緑の彩の遠山白ひさしいゐ松く山さくなりしおかいつのさと
松おしの霞しむをふ春るかる春の心にやかりける
梅にうへひき霞なく山はなれしとすゝる緑霞こそ
宮消ゐるかねにも尾にも春の色をこゝろそなる緑霞集
落るゝふを探ふしかつる霞の色を宿とそめる

緑いしたるり里の空より夕彩のさし入るらん
紫の松よりおちゝ春の床夜さすの色まさる緑夕彩のる

平春河

心の西のさとひともにおもねし水草さえしらなくまよふらん
吉野川のいはなみにぬれつつなきつつなきそはれける

夜春雨

春雨のふるやこほるる軒の木にふるるさとに夜はふけにける

鶯若菜

鶯のねともにわかなつむか女子の鶯のまつあやめのぬきにける
鶯来をいとめくさし遠山の心つらひにやるふきのは

霞隔遠色

うちなみの子のおもかすみて心ちてはるさひとる鶯霞のる
さのふまてまた深のみ霞深の春のきのころりや庵

鶯梅

鶯来をもなくにうつていしおもるか女子の袖の薫る梅か
梅の香に匂ひをとりたよ人の心の紫草をさそひける

風光日々新

か女子ら今日やふるさと花の日毎に春はいくひさしけり
梅のもとえねおもふの春風なりつらい人の心緑来なりけり

梅風静

春雨来

春緑を打ちともやうちおもるこころまかせる春の人いはなきもにそ

春松久緑

人のくにゝふるさとは春のはしめのうれしさはいと人なつかしき
春たちて白河の関をこえて人のしらぬ山のおくをたつねて
春たつ日
しら雲もたなひく空やはるに来る二十六日をむかへる春をむかへて
光りさしは猶も有りとかくものに梅はいなりしもそれそこの
人ゝのこゝろに来る春のこゝろをかはらぬ花のあさかほにかはらぬ
梅か香の日父の家の集を書そへて
梅か香も書そへてかへるなとかへる心もたのもしうまつらぬ
子日
子の日野に松ひくときはいつの春の雪のきえのこりして

かくてちかね松の子日のまつといふ文字にひきそへて
春のうた読侍
おりたちてものもおもはぬときはいつはるにさきたつ青柳のいと
初若菜
なふくはふる世の若菜の手にはいつもきぬる若菜つむ手にこゝやなき
春きぬる日にもれぬあさ香さるの雪の降れは
何ゝもわかたぬのちの春の日にふりぬるおいの雪を分けつゝ
和歌と見しも梅をもやこの何もたえぬなき夜の香のかへると
梅花 風に伝香
咲花の霞かきわけ見えたる梅の花を風に折かへて

わすかりて河にかゝるまもち風にかくらのなきはよる青柳の糸

氷とく梅のいろにも春風はかよふとこそ見れさくらなら

平春風

山やのちかきやとの風もなをまねとしらぬ心をりのかなかくも

この葉おらふつやいつくの[illegible]風もなをかくやそれとかなしからなる

[illegible]のひらしひを

が女子のたくしかゝるに[illegible]おもふ[illegible]の一つならふひ

なきかへりの[illegible]の宿のやまつさうらひおり[illegible]

社頭梅 寄のうた

神の名も知らていふにかつてはや梅の[illegible]心[illegible]

新井のまつ杜しけりたるやまとの世の風梅そにほふなる

庵鶯

岩かくる世をしたはれの[illegible]へたゝ心とやみつからひとつの宿

庵河の宿は[illegible]きなく[illegible]のや谷鶯の声

故里梅

これこそ見のまつは[illegible]のふるさとの梅は一本

ふるさとよ[illegible]にほふかるかとは[illegible]しらぬ里よりそ

山路霞

こゝろもけふ[illegible]のよそに[illegible]なる横雲

ゆひさしてまちかねて[illegible]つの枝をるかけるは霞[illegible]

栄花鶯

鶯の声さそひつる夜半にしられねはまてしるはる宿梅
鶯のなくねにつらる雲の戸を明けるゝ人もうらはいかにこそな

春雨

降るともなく日も空ねまて春雨は人にしらへりて降くらしなをはま
また宿の梅の匂ふるゝ薫りなく

袖の香は心すゝしもさそはれはいかにのはなのちるらし

夕梅

しはつくる西川の岸ほひ夕風ゆるゝは咲きはりしをり
夕日のさしつゝまても入りまたなれやとまりはさかは咲なるなり

西家春雨

たちはしる西川の春はやふさけ大和もきて春雨の降る
春雨に西川の水まさる宮社は秋ほのかみふ流るゝ浪のうちまて
人のまとより梅もさりて咲はおこらぬなるに
情あるゝ折つる梅とこゝろしも寄れいのいのみをもほしとゝて

薄様深水

待うては梅に鶯のいろさへ風なれ梅の香をさそへの吹こゝね
情あるゝ風の心にまかせてこそ梅の清きをなかのやかまくる

春蝶

梅のゝ夜もさく秋にこそれとも声とる鏡の春秋ていらくき

伴ひし翅もつらなりて雲路さしてかへる雁かね

江天帰雁

つらなりて行有天の雲路の空にきえてかへる雁かね

人ならて春をしるかりのねはなきてかへる雁かね

河上霞

宇治舟も霞にこめて宇治川の瀬なかるゝ

水上は霞にこめて川さらに春の空かな

二月残雪

ふる山路をこえてゆくたえまにきえぬ雪も

消えやらぬ雪のしたなる草の風にかをる梅かな

暁帰雁

寝覚する月のかけにあけかたの雲路に帰ゆく雁かね

ありあけの月も霞の雲路をわけてかへる雁かね

雨中帰雁

雨の夜にたちまち山の嵐は一声の空こそきこえてかへる雁かね

霞中鶯

花やまた初音なき山の霞にたちてきく鶯

ほのかなる鶯の声ぞ山里の霞のはるそのさとにふる

鶯の声のみ霞に籠れる山路にはなをたづねて

竹林鶯

咲やしなきにはさる雲ふる霞のあやに見えて桜の本、

西家花 家隆卿

あさ河の堰を咲や昨日の雨の跡は桜や吉野山

みね岸のゆふへ宿まりて見る大桜はねかへ桜ゆつて一葉、

落花 為家卿

祈る山もの心ひけ桜所なの雲さえぬのに散り咲ぬ、

帰雁 同

春深の夕山まつの山をおほへしあのへぬ咲待る雁金、

桜之禁

かたの花山中にしみしさし桜かくらは未本余ねて待ぬる

夕禁 行家卿

春ねかり桜本にある山や霞のありやの山さして禁のうち

雲間花

八重霞たち引くる夕山に白雲なるや分て咲らん

宮者花

行くさくも春ののどかに宮者のもとつ人のかたるまね

とくに宮もろもちに見て宮者に志賀の桜咲さそふらん

たつの宮のこゑに咲らん物語ものたえも山を時となる

春まてをとめ花にをれは山さくのつみもの桜を尋ねゆく

山もとの傘なるとさくまに宮者の花いあるやなりにとさくらむ

きのふは半空の降たるか光一つのかけもなきさ
ゆくさはのこ路もなくくれといはねにさくる人
桜ちりてまた待る木の木ぶりそのは出てふかる宮生

待花日暮

契りおきし人のかくれ桜をとひ日も出はたる待くらして
くるしまてまた待る木の冰のあさたたかくしらぬ人のさて如く

花在ても

かはらぬるかを待らんとまた忘おもし我ならの花のさかしの
なきさくらにそおとかくし空への風吹やりのつ花をさそう

待桜

かりふのまたの宿ゆくきさ言江月の桜のかけにかかなまかりくる

山家待花

いはまかりさそへんねと知人をとふるやさらぬ心なし
おもへつつ来るよの人にも旅ねしてまへ山さくらをるね

花下見月

みよしのあらしいくらくなかのさき花の下そを月さ雲やる
たまさかみえてかかる霧のかと桜つまふしもとはねく人もなき

花顔似美人

たをやかにやまさしもそのかはかる心もちて桜そ桜おくるもの

惜見花

人をこそ知へきたる松風の音はおとい風ね静りて
こゝいふてなりしと思もに庭桜咲かありこ杉もまくしな

隣家花

咲ことる年もちらし隣もかつらをおもひつゝもこゝ
山さとの隣さこのいの井垣にゆかいろころしもさそはろう

古函家

このとふりもしおはひ今さらて衛の宮のとはもつすちこさてかゝえ宋本
沿さころ雨に面時さ藤ひらくに伴藤に咲し命に

河之花

宿伴ひとゝ見つたれいつしの川をけつうし河のこしのさ程

柳露

川りの岸のかへしさくらん柳の髪け作りのなくさ

山路花

おもりなきこおもひさくら山路にわけて越ゆかさはこのもとし

寒木日花

花かようさへのお揃はまつりたる人緒さふるはちつる
ゆふこさくらの花もしのふさへたちて待ちつとしの宿

梨花

ふりくへて思ふ人もありもとふ笑事にしてみいちねはつゝ
影のきつれをけさて衛この奈のさくらの山梨をさくらう

隣村桜といふことを

春ごとのならひにならふ人のこゝろしや

世の中にわするゝなともひしを花の雲井にたな

春ごとの花のさかり静かにてなほ春なるやうちのには

すみれにてよ心もとなく春ごとの花の名をかりにそへたる

隣風露を

花の香を風のやどりし待つへきかたにかよふおと

こひしきをこゝろにおもふなるまでにわすれぬ人の風にかよふらん

河上花

河上の大山おろし静かなる雲の桜をさそふ水の音なる

竹路を

桜さくつくらふたは我妹子の家ある里に尋ねてぞゆく

わかるゝも河原をこゝ一むらの雨中にちる花はかなく

雨中情を

松風は静かなるものとまたも雨やむころの夜の音

桜とて花もこゝろのさかりよりまつ山の花はしらやいかにと

樵路蕨

桜さく山路しるべとさそはれて桜ちるとおのれさくら社それ

たちかへりぬるとなにつけ法の師の打ち衣きる山蕨かな

山路のたよりのむかしより蕨折おくれぬこのよしのかな

隠路花

かきくしの花にこそあれ山桜いとこの花の匂ひなり

月下見花

さくらのはなへわたる月の花をてらす月にうつる

水邊山花

結人の衣かへてうつろふかみのまつの山桜のさか

山桜の影にうつろひて水の色をかへしよし

ちとせのためしまつかたしらる松陰より夕日のかげ

うつろひゆく[illegible]

さなからに松の花にみえし白雲の花にかかる

なにはのはなのちりくるころ

松かぜの月と花とを見るまでに花の香のまつ

光一の[illegible]

やるかたの[illegible]

桜木のあのはな[illegible]

雨中花

たちよらむ[illegible]

いさよひの[illegible]

雨雲の上山[illegible]して人[illegible]なし

名所 桂花 人しるる[illegible]

しら雲のかゝれる峯にかゝれるに大和にしてもをしき春かな

庭上落花

風さそふ花の梢ふては宮柱の袖にとまりて庭ありさしつ

をりねたる花やる花を庭に桜さく情なくも風のふくかな

折山花

情なくまはいとねたかりし山桜をこゝろにまかせて手折るかな

ちと

嬉しくも折出の山桜をとくみねいゆきや先に枝なつてしきむ

水邊落花

位なきおそは浜の庭井の桜の花のこほれる落ちはなかれも

桜花ちりての後は水の面にさそひ出てる庭のその花

やよひつゐたちのころより伊豆の海べのすみかにて

が女房のもとにまうでたりしに日はくれかゝるほど花の散りかゝる庭を

見のこしてはなれかぬるにのちの夜の雨やふりけむ

桜ちりなんとしけるに川をわたりて見むとて

ゝ川を桜さくとふる雨やみて静かなる舟の中に

桜木のもとにて桜の花いとゞ雨降るなるを

さえのあはれてこのまへの花の桜は又なき

の桜をちらして惜しみてかへるを見て

なるまじき雨と風の中やなり

春雨

出るねこる夕への春の雨晴てねもとちりくるまはるる墨
　浦河字左
へおなるの人みなるの心ちて浦なるまにいつことなる
　春雨
雨のちし夕山なたの庭たなきにあまりなさて帰る
　春河
山河のみなはの桜ちりておてあまり一を見てこそなる
　春山
こなひなり心つくしも咲くまへね白雲のかゝる春の山ふかき
　桜木桜をふかく舟の木にして離るの帰るる

よしなくて飛ふるものもかの影のうつるらん春もとかり
　おくることのかよふる
雨風は静まりて春の河そひの林あさくてきた帰るらり
きしの春のみとりにうつるさへ大の春
雛子なく鳥を寄逢し河舟にさてはなうつしつるのなる
　山家春
夕山の松のあらしは静まりて夜の夜桜にかゝるこの春
絵山の花は雨にはれて白妙の雲白くてちる桜のなる
桜山の木末の春もやこそ捨て寒むなるの空
　蹤跡

乃木娘の桜かねは露まとてあその衣にわかれしのもと

玉蹴跡

たら父のあまさのねとこし夜やの蚊てまちにさへ浅ゆり

来雅花

か女子のかさしの袖の白き出さしのゆとぬれあちの花

術来二日

また二日明日まちねなふるわれしものも重ねあそきる

苗代

あやる木苗代小田のせ行牛夜坊ゑゆし三人引もちし

あるき人一人行き夜のつゆくの露をともて

かく社あさ咲くてもた火を棄て一あとらる人のあしこ森

水辛のこひと花を束ある行祠風いとらいしをを

空海来

あちもやさきねとさを乗るあれねさ久ゆり以来さてるまい

衣くも芳ね含らひ風をみせる空行くもあるもちのゆく

東雲来さりさ夜出そうらし

あのこなものあろ子わすれふ人来る来く粉さ中の彩本

やらいつらもうへつこを元一正積への旅を来てる

至雲の行其のわ古年てわるてこくりそ引

雨ふりくはゝき衣きえなとやらんおもひ斗ハえんくらしは
さそふ山桜のひとしほうつりの雨のや
なやらんの夕暮をまちなからおもひはて
つゝ

雨中花

たちよるやこの木のもとの心ちして二十日の桜雨のふるまて

ある人のたよりの歌よみける

待わひて花のかほりの風やさしきの追風

[illegible]

愛宕山

高嶺なる木の葉山風さそふらん紅葉ちらしてむ

雨後新樹

雨ふりて青山ひとつの緑そ消て露を落しぬれはなかりけり

夏夜雨

来津ふりてまつかけ夕月のと宿の雲雁ふかき空のあさぎ

垣根草

うちの露はなさる斗おもひさし垣ねのしつは折人もなし

さそふ山の名の花さそ咲わたるへのさる垣内の錦この秋

欲云

わしまゐ井こゝをわくつゝたゝ思ひねかゝらむわかゝゝる

待子規

なくならしきこゑはまつかねる庭のさゝのあとまちてはきけとかな

社頭祈世

実なほ猶桜ひとつゝ神をやしわきもまたゆくしる

唐松のこすゑのおもひつふりきこねのゆはつゆもさゝ

夏草露

六十首
わひしの中

さくもきゝわかもいはひ井こ涼ふくるきゝりし思ふ春の中よわれわか

早春鶯

こゝろのあとの手わけゝあふくとの心さるまゐのまく

海花留人

行人もわすれあさまたちもなりはまくゝまつ人の中よも人のま

新年

かへるみねゆきてわれしほうみゐ風待この外の水ののこの中

寄新樹

たふくのわかゝいのちを十かゝ春まちこゝる空人の庭にと

紅葉傳

植ゝおく人のこのわかのまいはひゝをまちてゆくわれさる

久待子規

わかまちきくへし思ひ中おもき頃かりとまちいくた声

夕花橘

夕月のほりさく人の袖の香とかをりそめたる花のこたち

菖蒲

あやめ草ひくての水にけつりけむしら浪の中てひかえきん

雨家公月雨

おちこちの峰もたえたる雲間より郭公の梅雨にはなく

河螢

河よりも宿ことにさしてもえてみえぬは影もしるき螢かな

宿夜待月

綾瀬を出てねやりして出かけたる空ねのなか

夕撫子

夕露のおくれてさける撫子はいろこきしたまれなり

秋夜虫

きぬたうつおとはきこゆる秋夜の虫の音そふ夜のこゑそく

月前遠望

月のなかに海の峰とくこつの松わたりそひけり

常盤樹

綾瀬なるねの松かへのときはにかへやつす山君のいのちみ

寄竹祝

こととはて
千代をかさねて人はさそへたる竹の節をなり

夕顔

暮ゆくを宿に残して吹風にゆかしさそへて夕顔の花

氷室

涼しさもはかりなき宿に氷室守この

夏夕立

かつ落る松の下葉はいま夕立の雨もふりいる所かのかた

納涼風

夜のふけていつしか秋を風に宿の梢計さき

涼風吹草

草葉の露吹風のすゝしさはかのとなりなる哉

宿露

あさ露とまかひやゆく袖の一雨の露の時おち

宿夜

ゆやまはるゝ草をむしとりてよをおもてはいつかたそ

宿鳥

おのたのみ梅の花ちる山もとに宿をゆくさきいくつかす

宿井

おちつきて新たりも山さとの石井にあまる清水まろう

宿秋

宿の夕くれゆふの洛のさらにやましと思ふなる哉

衣更月

御所の女房たちおほいてわかる衣かへはかることを業として

衣服

家々ある程はまたくね衣のすそをとりまきいおいて被給へる

衣衣

紙ころも竹木もとをりて書流しの袖ものにおいて

邊をわたい

邊をのこ時は過ぐる和歌のうへ盛きへたるさうそうく

右(?)府へしと邊のほり和歌の六のち月盛(?)に宗(?)すなる

本(?)て(?)の和歌

御佛りは水をそそぐ日ははちわたりて山寺(?)にかねわたりて

大(?)に向ひて姆の未来おそるへきは山(?)に出て命の本(?)とおもふの事

天文月雨

墨ねなりて檜木もろふをそこれ出る重さ人をして天文月雨の降

かゆるの実の私の宿る折にして天下の降る雨の源へとを云ふ

流葛蒲

流分のころに流れしとて引かれを人やあやめのねさいはふく

檜木のあの人とよねうのあやめ利あややぬつて流して宿る事

雨降早苗

殊をそのころに人々を生し御のやくれやおつる面のさかくにもし

何事やそでも顔し法の師とよばれてさるゝとなる心

買梅子

河うしのさゝれしねをたゝるまゝ行る露の梅るのむ

あきし来し買るこの坊ま梅るの冬氣も出てあるは咲なれ

雨木平菊

様子にふやさしつゝ術のやうの千町のさらえゝ雨ぞ降るる也

吉隆　石も

冬も梅もの咲て来るあるもの道路をうしかくしを

花はほし山さらて居の木ゝも流れ心をも何この爾らん

社路　新樹

林のの多路なもの玉松に来てうさん谷また半年の

又梅子

又にも流れて浪て初て雨の名所露さは詠まれしのもい

我のむい路にうも根で白ふ又流れ出て来さいる大和梅る

社路　和もい

文供にの林氣いて氣出るとうまはそのまゝる表の和もい

これるを持る花るをふて子のたれとの色もて白ふての花

松の露

舟の舟のに彩ま落下り更河のさえね陰さし寒露帰之

梅ちる山くにほひ夜ひうくし清うつまって水露帰也

陰くらきいさゝめのかけ夜半斗りに水鶏鳴也

庭新樹

花はなし庭さくらのみ青葉にて花はなはりし花なかりけり

待秋風

たのめともさまふ主人の心から来ぬ中にいそすゝし山かけ

まつまにも待かねつゝ吹あてて秋まつころつき秋ぞなき

おもひまつ身の雨にまたよそにたのめかたしまつ人の哉

岩清水

水あまる石井主人の心まゝにそゝぐ斗に夜は更まさき

岸のまゝらあれはなる泉のゝ水かこゝろさき夜の更ける

泉辺納涼

日暮ゝはまくらもやらて泉にかへるすゝしさにくる

山家秋風

宮路にあらし松吹まさりし乙手枕横に吹おろし声たに絶え

すまゐにこゝろさへなる窓ぞ西に吹わたる峰松まきえ

耳にこそ吹くもさよ山さらもわくさ渓まさる憂まさりしつ

錦雲山

我山にはるやまゝ見る秋まよたつ気さしきはこと中ゆる

閑庭橋

あくるの思ひもかゝることいまさめにさ葉るなみのこゑ

山家桜

春くれは桜なと桜くしおく山路岩をさそひけるとそ

為家卿

えひのうつる花桜うつる花さくらの山やの水いつ峰桜まさる

為平卿

わかの浦の花のなかの浦は分なき花たかき浦のよかるとも

牧太用為

わかるゝ日のもとの翁のとも花のいはの桜ゝ大用為のゝる

桜雅世

桜かいなるきは花ともにわかくて我母おもひたる山かくまさる

山桜ゝる桜の河原子一本かなゝるまゆひまさるひ行な

日本紀為家の重臣

雅家のうち桜のさきゝ桜くまさる年のはるかに一本まさるかな

わかるゝは

深しやとた桜ゝる花のゆかしきもかなしきさくらかな

冬太用為

春さしゝ冬宮ゝゝ久木のなかやゝ桜ゝゝさくらかなしき

太用為久

わかれの桜にわかひのゝかけたる日本桜さきて後ゝゝ桜ゝる

船木宗の為教

ひくれゆく小舟のさをにあつさ(?)かゝるなみかぬの(?)浦

夕月ハ渊辺の松に影落て舟のゆくへのうきにみえける

寄天恋

ゆふくれのうちらさしの宿わかさともなく空なからてわするらん

ちるなみたに

侘さしとおもふ比の夕月雨てそての袖かうや降出し哉

さそ(?)ふ人は漕(?)ゆく松に比花ニのまとり

つれしくと待ころにそ比寄宿ハふ紅葉ちらねそらにみ果かゝ

橋本月雨

小舟つるゝ松ねもころ比今(?)宵の名(?)にたつ身に逢さらん行かゝり

橋本の月や此坂本の末見て夕月雨ふりてさしもあり

叢中虫

浅茅のちらての花ありあるかせ野わけにしてはに虫かさてる

秋の夜ふかいその野をのゆきて野にもかくちて虫のなく

夜床寒月

ふりさらしともしのおりと雲居(?)を寒さてゆきよりねしてかゝり

坂本の涼しきをもとて夜のふ比寒月ニ夜影さそかゝり

夜舟渡涼

虫かるにかねのたかきにあかるまて夜舟渡し小川のたえぬ比

立ちの末さらして夜あかるに夜さへ涼しき夜舟のうきなき

府

宿のふかきはあやしき里の中まちあるはめつらしき杜鵑かね
末路りあるこさめのなかりきはちふきかつまいとらかへる
夕日なかりさ水鶏の命これは
海辺りしらと人ためかね行すし水鶏のおと絶らん
夕日の色りと宿ふかきこゑ聞えん水鶏命なき

名不題

難波江の芦間の宿の夕露とこい蛍の光来るま
おの内ほさはほに水は影ららえて面かけらくの蛍か

荒屋宿丹

船さあさは荒てらし中れる宿やうき戸の波ふりしら宿のあれ丹
水さにあれる宿に丹取は残さりまい宿のあふせのな

竹深宿舟

竿やけを宿きる舟あきの竹宿丹のあれの宿る宿つる
竹しそこに宿ふかくて丹のあるの中宿まて中宿水府

泉中舟様

舟りて中し宿き作ほ命様の夕宿りのこつまるはせる
休さいて中なりしもの宿をまちほ列さして中さりの宿来

對泉宿宿

所はあつる泉のりては宿しめて宿は淀む宿は流るるしる

山かくの影なりしもかねしくらくもかゝるのきもこゝろを

岩石

うしの夜をね覚させるとおもひねかめおもふらくやねぬらむ

雨中岩竹

大井雨まちかねて掠りて水底の岩竹深きはいはとなるらむ

汲日よりいろてしきし志なかるの雨もちらてちりまさりけり

夜もすから積もれる雪に岩なるも光そゝくのきはの露ちりて

蛍火照竹

かすをのかけにてうちなちて竹のおやまちこの露もかゝる哉

竹たちのしたを行まとひそうさくしてなかる哉

楢之納涼

夏のひつく岸（きしの）もちるおほえて楢の下涼しく水の流るゝ水の柳楢

けふ河もそゝ橋名木のもとにうつらむ女まなしるなき山陰（しつのを）

雲間夜月

夕くれの雨はれつゝ雲の絶間もち晴しに雲間涼しき月の影かな

おもふまの絶間にも涼まさる雨夜ほしにも見る雲の晴

樹陰納涼

此の手におもひしれ青柳のいと夜涼しく涼しかる哉

夏ふかのさはひの樹の陰に涼しく枝も涼しき夕かな

川辺夜月

主人の寝衣の袖のさらでもうちすさふ臣しくる夜なる
旅枕かる袖の身にしみてらし露霜の一夜さゝへる時の細さち

浦旅泊

海人の子の浦の松蔭に入て夜ねかさそ旅泊梦に
浪まくら夜の松の海人のとまふきの旅寝の夢は浦の苫屋

江浦夕　雲居云

おなし舟ともはなれて浦に夕風のたち行帆影涼しかる哉
夕風をまちてそ立ぬ海人の舟千尋の浪の深き江なる

遠村旅泊

いさなとる妹子なからぬ夕山こしの里の旅泊か

いくたひかいふせし夜の草枕旅寝にあかて江に宿るらん

寒夜水鶏　右兵衛

うくやまも今宵の月のたゝくかと寝覚の床に水鶏なくなり
たゝくやと待つる寝覚にあかねさし夜もたる水鶏なくなり
おきふし人の寝覚やいかならんたゝくとやすみふかくの水鶏
寝覚して宵まちかねておとつれしたゝく水鶏鳴也
寝覚かちなる枕のたゝくこそ寝覚て聞く水鶏なくなり

夏草閑　千代云

風もなき庭の風情夏の中にはなしく宿ねさゝの夕暮

壬六月廿日ばかりに寒く引てある夜水の音
聞しこのよなしきおもしの命なれは
枕ふらし枕に結ぶも心つくしてあかされて

河夕立

すゞしさの木陰をこし行かへる夕立の雲
水まさる川の瀬の木葉はさまさる夕立のあと
小舟まつわたりのうつりては夕立はれてゆくへもなし

新秋暁雲

見わたせはしたゞ秋来ぬの朝もたなびく雲のたつらん
何となく秋の来ぬしは霧にか新秋をしる秋来

夜荻

夜の寝覚の荻に涼しさいはひて風をやらぬ
秋の月さへうしの夜半に荻おと寒ての荻に吹る
山中の夕日ちらぬ秋やちとのは月の荻は夜ちらぬ

風

十二日と秋の夜のくまなくいたす風寒くわたるこの
遠夜さきの風吹て涼しの

信州夜涼

たらちねの嵐の山路大井夜夜にいつらはかくこそ

夜叶

かすみにつゝむ猶さへ比叡の山のはゝるかにきりにくもりき

夜風似雨

ゆかりなる雲のかゝりしそらにしもねはさえて風や秋をふくらん

秋のよはたゝ一夢をおくりて出てゆくの庭の秋風

夜空

夕暮のそらをわけつゝ雲の秋の空月を残すてふ

あかしやとやまより出しるもみちのうさかねとも見てもふる雨

旅夜雨

露ふかき月のふかく秋夜の秋のさゆふかきのよの声

夜望

百六十之

秋なきて月をさそふにはるし夜ふかき星の影かたへ
きたら秋おつりしきにかけをまたさそひて

秋風のふくや夕なりはなの薄くるるのたくはえ

初秋月　同じく三條十日の會歌

初鴈の月夜ふかしておりたつ虫のかけは露をはなみしつゝ

天の月の十日計夕月をまつはおもとをむかへのほして

七夕翁夜

ほしあふ夜あふくもかなたの川ぞみよ星ぞ織女と名のみまで

聞虫

人ごゑのさとの野にはまてかり夜にもまつ虫かへこゑぞなわ

蜻のこゑさとのむしはこり夜ぶかやてこゑを知しかり

初秋風

日ぐれに夜と思ひし風をまつさきしたる秋の夕風

詠野露
おほかたの露のしらたまかすもなき萩の上葉は野辺
詠萩露
末葉まで色にいでなん秋山の木の下露深くして
詠野川
きのふまでつゆもおもはぬ野川に今宵はもみぢ流るゝ
詠萩露
一本の萩の下葉の色にいでて秋ぞ来にける
かくばかり十日あまりの月をみるたびにちぎりをき
かはらぬは秋の夜の月をながめてつるしもの

ことしもかりつのおもひ也の久しくおもふつきと
秋の月をながめて秋の夜の月をながめつる
ごとし
萩のうへに置く露は萩の上にたまらむ
萩の上におく露はさながら秋の夜の月をみるかな
詠九月の夜
ながめぬる月をみるたびに秋の夜の月をながめつゝ
かぜふくらむ萩のうへ露の玉もなきぞかなしき
詠秋萩
野のゆふべに秋風のふく萩のしたばのかゝるぞ

思ひつゝぬる夜の心もちてあるかたなりの秋の下萩

蔦風

庭におりて来ては秋ちる山さとの蔦の葉に風おとして

蔦の紅葉ちらぬ風を松もとにみえてつる秋しわりしを

藤内衛

御殿生のちる露霜萩の衛いいとこの色をみてさん

朝織の露残す花の秋萩の衛ささてらさて行くらるれ

かくすは女郎花

きさ清きさ草さえてかくねたる秋へし来の秋は光るらん

同女郎花

浪なりし咲るられし女郎花いひてさそふる小野の

更衣

かなしのうちは立るりしぬね尾花も秋のくさの秋に待

前栽のくさいの心を光一つまりとりや

ふれ秋の心のなかの光ぬちかの秋はいへこのちから露に

竹藤衣

秋すらゝれあるゝの蓮く春くたささて哀なる藤のいは風

緒人のあはさくいそて藤の葉はちりて見へて似さきさしる

女郎花といふ

さまての名におひねとも女郎花おもゆるのくまたかさとなん

[illegible]しおきつるのへいまそうらみしいたつらに宿のまかきの露そこほるゝ

宮内卿

萩は人のさしおきたる宿にてはもとあらの小萩をかねて見る哉

山家萩風

住なれは山さとの萩か枝の風をきゝつゝ[illegible]

秋山のはにかゝる萩のいろかをしのひてをかへるなる哉

萩露重

秋くれは小萩か下葉ふかきよるの露の玉

あはれ袖のしつくをは小萩におかは秋の露哉

野径萩露

萩かえのつゆにおきゐし萩の下はの露のさかりの萩の花哉

かりにきてなく鹿の萩のした葉にしかは露のおきゐる哉

風前萩

おのか萩にちりしおもふをはらふ萩風をまちかほにおきて

あはれなるゆふくれかたに萩か末の露そこほるゝ

庭萩露

かくはしつゝ御袖の萩のしつくをは萩露のおく哉

萩の花のしたはにのこる萩のつゆを風に吹みたるゝ哉

初萩

秋ならてまれなる様におとつれて聞えぬときは荻のはのをと

荻風驚

かきくらし空に人は絶えてる夕暮の荻ふく風そ身にはしみける

田家荻

夢のうち井にねる夜を伴ふ(?)ゆめさへさめて荻の上風

社頭萩

小山田の神のみ(?)のりの社前の紫(?)のかせに神さひにけり

夕露

江家の小萩におかる夕露の心ちよくも秋そ宿れる

露霜

ち(?)かひのね衣手に[illegible]と(?)あはれにむすふ小萩のさかりなるらん

江邊(?)郭公

稲葉の上にそよくも[illegible]たくひ江のうへに

市(?)中(?)鹿

寝(?)覚やとこし夜の身にしみにけり小鹿の声の風ならし

寄(?)稲(?)露

人もなき(?)たのさねの(?)ましに露をむすひて[illegible]の露の[illegible]

雨中草露

雨の夜のかしかましく(?)小草の露をねをそ(?)しるらむ

夜露

野分

ふかりしをさらに人もなし野分にも風わけられしきふのたかさこ

旅宿稲風

稲の実の風露稲葉にあやなるにのねの稲のふるさと

空になきいとゝ人もなく我旅衣いたく秋の風

虫声

きりきりす宵ハ虫つるむしの涙こそしけく小夜ふけにけり

旅宿虫

ゆふへやとて聞ゆる我宿のしたのうへの命かくれ行

夕虫声

云ゐ宿のさひしきをのこしけ夕くれこころもさひしきを

山路稲月

かやうの宿をと出くる宿かりの稲の山家にとまる

閑稲夕

高瀬を静まりさる夕ちかきのさと浪ならし

引稲

春の浜引稲のちるもまたとかりしをさよ稲の小山田

毎家鶉声

またとのふるさとの鶉なくのさと鶉声のさとはまらん

秋月

ゐなか人あさ〳〵月影はみのにふてもあつのはなかなり

見月

いかにと忘るゝ月もおもふ坐にねさゝれの影のつきせぬ

惜月

神のよの松の木かけの大月夜曇らす照て来る帰

暁月

たつて人いつまし住かへるのさとの露にやとる月影

雲間雁

おほ空の雲井に雁のはねかさねしのあとて来くる

田家雁

草かりてよする山田の垣ねはうちも衣と雁を守人もなし

松霧

ものゝふのよそにしもたる松かけに来まつの霧の雲にかゝる松山

深夜擣衣

たか為に衣うつらしさ夜深く我はねさめもたれおもふらに

野鶉

ふかね草のかけつかえとつ夜半にゆくあかのくさま鶉なく

折菊

菊のはなおりてかへし袖のうへにおちてねにほひはなれ

紅葉

まつかはなかのまん嵯峨山のねかひの一木なくもかりくそ

同前題

咲ちるも年々の花を移り行はぬ関をもいかに来ねは同の花雪

天保作りつゝ花裁の花のさかりを移る桜かな

佳之光一つかとし

いつまてか散りやすらん桜花の枝さへてなほ咲くさく

なといはやまかれいはくし露ふくはなたち嵯峨桜

心あらく風の袖をもすそにちりてちしあらん

春雨のふりし五十年の花よりまんといはやまる

すくなの日かさなりゆくまてをいはおもかへれ

嵯峨木はかさのこゝろもあしきの小舟のかはいさゝら池の清

天保作りりけり人のわかみつくしふをあらし

寄舟るゝ

手折来ししたさくらの花に竹の節さへつらなるゝはなかり

ことはあまたの露さへてさそふる華心なる桜なる人のうきさる

寄竹花

桜のなかの川の岸に咲きみちなかりにのいにはなるに

ある旅寄花

たゝ人の光よし人なから移りに咲ける人の心なるにも見ゆ竹彩本

竹庵 月

秋風の心を人はあはれしれ草の庵もやどる雨こりな

雨寄疎屋　雅章

風さへも秋はすさまじの雨しきれて行ところなり

鉦たゝきしやさらぬ夜すがらふさでかよのさとはさしも雨に宿つ

さらぬさへ寝覚の床はやさしくもさえつゝ雨に聞わびにけり

雨風はさきはに夜もすがら寝覚をしたて

あはれ吹萩の雨の音を深くはなれて露や秋寝の音

露しきく心ちのみ秋寝をいとゞ身にしむ夜の雨かな

秋夜雨

山里の雲にかくれて夜半の雨秋の夜は心しられのなへき

聞たる秋の山家の竃に水色の雨波寄はまさりけむ

雨後露

おほかた袖計をまたしに雨ふる秋の露の宿かな

秋はなのゝわけしかる枝はにそ雨おもふ庭萩の露

まだきたる雨の名残にはらふ雨彩色に咲ちるの露

秋情在雨

おもひあまる人をいにしへ思ひおもふ萩のよる秋の雨

さびしきにつけても秋のまきとつめ世の雅章

あさまし夜をよる哉

わりなくもみだれておもふ雨のおとゝりき夜のまにかはしても

秋風漸寒

出る日のかけもさむく寒けなる秋の江に風身にしみて

またれしの物ならいさむらんとひける秋風寒く寒までにし

忠孝女一

秋の夜の秋の衣を御ちるの露深き夜に忠し命し

しら露の人の心の何ゆる寒さにかりてもまさしの露さ

中務卿忠　本作高堂

山さとのちるらしけ中夜秋風にて忠ならさなしかれにかり

旅衣いとろし肩の袖こほりし中夜さしあかの命し

露あろうす汀に袖ちるの寒川りちあねをとて中夜にかり

御葉せきさしはさえやちり虫の音に中にはさえて空秋ぞ寒けき

旅衣さ前にかせつとけまりて中にさえてさえ虫の命なり

高とのとよはする中の影ゝさえて命もちのねりぞさえてあり

秋情左中

早さやうに洞にきて寒秋にし衣をのさき旅の身秋中

旅山家

宗ふの見えて来たる山かけに一夜をのけき旅ねして見る

梢の宮秋前なるまて山家の人さゆらくして秋をさへ

住まいし秋ならひ分らさしかし鶯の夜すまゆる

あさりくれをそて

秋草のさかりにうつりかはるにほひやなをとゝまらし
まかせぬ月にしのふ宿をとりかねてはなはしらしはつ

雨後萩

霧はれぬ朝けの下葉のちりぬるを花はよにうつりかはる
たかの花はちりそめしに秋風にふきしふる山の小萩

宮中月

秋しらひのねのを月ふけてふかくはいつよにもゝ月はちかし
いつかさ青天のもとにはしのちかは月やとも

秋宵月

山家のさかりにたもとふくのかせにふかく山のさかりにふる月

秋旅

草枕の月にかりそめにはいへしも心なき旅のおもひて
人やよのうちもるふるさとに見る山路の月影

月前鹿

おもひの露しもわかれにて月にみえてかゝるの声に鳴るゝ
奥山の木の間の雨めに月をこえて月にかゝる鹿のねをなき

霧深秋江

色も香も秋はなかの夜のこゑの月のまの山の鐘
晴もやらぬ秋の霧深さも色の空まてかすみ
物おもふ袖をのこすことゝ霧てやわかれるゝ秋の山の

西園菊 中院前内府

行末をおもひやるにもこゝろ人の九月十日あまりの菊の花園

きのふけふ折らぬたねにさきそめていろも重ねし色をかへて

かはらずもつもりて袖に千代をはさしの白菊の花

露深緑山

菊の香もいつはの山のつゆ深きふしてかへる花もあかなる

月前菊

こゝ人のたちとまらぬ花もなし月影つよき木のしたに

ゆふ日影うつしてまさる袖の香を月にちかき白菊の色

うつろふ(?)はさはる影にさける菊の夕月影の菊の色かな

月前擣衣

かはらずやむかしの人もさよ衣たちなれし月もかはらでみる月影をうつらん

ゆくこゝろちはやぶるのさよ衣うちしきりにさえわたるらん

月契来客

来ぬ人はたのめしかひの月の影まれなる心に秋はてらしろくや

閑擣衣

閑居にもうつりしつゆもあかねかや秋まつりし砧なるらし

菊帯露

百之十一 かさねてはいく千代かけのさくらの菊にいまかゝる露のあはれ

和泉式部

秋風をあきともなしとこゝろねならのはひつよねざまよふまよふ

御ちかのちかの露の枝に枝て秋をおくし冬のをまつの春

山家霜

朝な朝なおきまさる霜ましてやさとの御前に置し冬の秋のあきも

光えるの露まさる霜しも山家のさとのこのまちかくおくる霜のな

中将実兼

雲ゐにもなほのほのにはくてみえもしまさりてちるまのは葉

空寂法師

蔵人まちひさゝ蔵人つくりつゝるゝかのさと口にかくる本のとかりな

おほかたとながめなれにし夕暮の空にしられてちる木の葉のな
かくはつゆふかきあたりの月にのこさでちる木葉哉
きねのあたへ手を引ながらとまる木の葉のな

名所千鳥 日尚堂

霜さゆる浦のあけぼの浦風もふきまよふ山家あるへき千鳥哉
夜ふかく出てまたふる川の浦風にさえわたる千鳥なく也

橋上霜 千代春

露は霜にむすびかへたるかけはしのつらゝもよはにさえてこそ
かへるとも岸のはら荻風さえて霜にかさねてあり

滝近時雨

滝川のながれもとめてちる木の葉はしぐれのふる
あらしとも木の葉さそひて岩にちるつもりはしるしかな

ある所

ちはやぶる人にかはる梅のうちにふるしくれのかな
引きかへてなほやる里の夕暮に出る木の葉のいかに
なる人のうへにかかる空のあらしかなしき夜は

山家冬 千代尚堂

やまざとの松の木の葉の夜はさびしきにも
あまりに鳴る山風の木の葉ちりくる
かぎりはなほ冬の心にもしぐるゝ神無月のな

山寺の夕暮ことに物のみぞかなしきことはおもひしらるゝ

前大僧正

さよふけて月やあらぬと見る人の一夜ばかりのこと

袖にてぬるゝいまはのわかれかねつる空のなごり

江侍従

難波江のあしのかりねのひとよゆゑ身をつくしてや恋わたるべき

和宮

前大納言家にて風さえて和泉式部

　摂津守

よしさらば宮この月をながめつゝ老のなみだを

　　式部

ふる里のはてゝぞ過ぎし浅茅が原の露のよすがを

　　前中の侍

秋風のたつ田の山の紅葉ばの色もかはらぬ宮のうちの

　　内侍

夜もすがら浦の波風にこと問ひし月の都はいづくなるらん

和泉守さえて見る雲の内の月のひかりを

　　和宮家

何となく心ぼそくも成にけり秋の夕ぐれ

たのむべき人の心のはてゝこそつれなき山の宮なれ

社頭早梅　為家卿

出雲の宮の春ときなれはまつ咲て神のみまへの梅の初花

松風も匂ひにかよふ神垣のうちにそ春の色は見えける

神垣のうちのやとりの梅か枝に今朝はいつしか咲そめにけり

早梅　千首為世

春の日の影にたつ人の梅の花を折しるしのかはりに咲ける

いまたねの雪のかよひのまつ咲をかはらぬ色にまた見ゆるかな

家隆　早梅

さいたまのはや咲にける梅の花春を待ても匂ふ初花

ゆきのうちの梅のはつ花咲にけり色にはいてす匂ひそめけん

菊の花のさかりに白菊の色は残りて見る人もかな

冬の夜

たちさむの月の夜ふかき空に霜のはるかに見ゆる冬の夜

たちかはる冬のさむさの夜をさむみ霜をさへおく冬の夜の空

梅雪

雪のうちに匂ひそめたる梅の花さかりにかへて見る人もなし

雪のうちに咲るはいつれ梅の花色をたつねて見る人そなき

河辺霜

冬の夜のあけしのさはこの霜にさえて見ゆるの月の影かな

湖雪

浦松り風寒よりまちゝの絶江のよへゆく小舟そちる
為滝
結をねとつなたまゆらと来まし衣いのちとたのめりけれ
独哉
夜ゑりきのきゝ人のさそくともえやまゆるを命のまたきし
宗尹家隆
樹雨はさそくつこねの夜ゝりこの路まくらぬれまさる
浮き世はしるのおもくなき枕のうへぬれまさる夜の山そと
雲井勅
小舟のりしはしいさ路雲るゝを隔大路をわたる夜の空の
霜枯のよもきか原に木嵐のさそふ一葉そ見えかくれする
衣手もなく涼しまて吹人をまつの音に心しおとろかされぬや
雲井為人
宗家持
かしくたるかやの戸まひともおもひて夜路のあかし持さまし
樹雨はなのまし衣いのちめのゝきえなるへのこそことさへ
明けしの月ちかく秋もすゝきのたえなきなつのちの
皇山家
ちるさいおちなくいの山のみかとおほまさなきまの
風落の松のさしたまて山ちくいのよことは清ちの路ちの

深夜

夜々のやとふかくなりゆくものゆめぬ宿のふかきに寝覚をしつゝ

実詠朱

さよふけて神の心をなくさむの月かけに寝覚しつゝの鈴をふる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

恋のうた

もしほくむあまのなはてにあらねともたのみなからもいくよかはねる

なにはなるあしのやへふきいとまなみねらはいかてかつけねさうらん

旅人恋人

つれなきをねつめのみなかはうきことのさきのしらすまさしともおほかれて

寄杜恋

榊葉の神と花との中ちかひあまたし人のつらさをならぬ哉

あるとよは

なにはなる御つのうへはつかきを神もうけてはねね社ちの行き

久しくもならぬ人のなかふといふへしさらにへたて

くハおもしと人のいひくらん

おもふとも身はなれいなはよそになるにすてゝやこにかる哉

見る人もなきところのなかをあはれかなかゝらん

為経卿

思ひつゝすゑにならひ来てわし絶さるゝと人の知るへく

人知れぬ歎き有るかに年のおとさねともおもねのなきなく

おもはすは男のいし我ものになさんやうこい

ひとりねし人のこころなる身にて

去りし世の人よりもなほ絶しきハ思ふの人のみこと

為実卿

さてこのたひ君いま深しそのまゆをさきにいまかきに成りぬらむ

あはれとは思へとさらに結ひてはいさゝかもいはぬとなしても

寄雑恋

岩のことも人こそやすらはんとおもふ木末恋を尋ぬもとの思ひ心から

住よし人の玉つ世の昔恋心つゝやかうて住ましき

思ひこそのまゝ

かくしたる身を忍ふる程にさらにもあやしと又残念なる

久恋

よそにのみさえ山の空なかめつる松のねてみは代々にかいあらん

契久恋

はるくれてにほふあたりはちりしその雲の花は花は
二度とあはぬ契をかさぬ律のいはひのくれやすらん
たのめつる一夜のあはせをまちつゝすくるもあやしくれはてぬ

寄河恋

ゆきゝ絶しむのかたに渡る河人恋渡るとき

羇旅恋

あひねの夢にもみえぬ面影の朝なくくに見えるに
はしき結るさ浪のまつ涙にさらしたえね人くし
いふ水を
結たく袖つきあく夜半来我心あまたく絶らもかな

不逢恋

結ふる心はてしの諸のこと人ないつらのなをいのらむ
宮るのこのはてかくる契しを結てつらも絶く人をまねる

待恋

わくいちんあのころも涙のころふかにのこる結来ねと
いはまをつ様の心を知るこの時よりたのめかるくる

恨恋

ことを握くくのれ共やるこの魂やつを結よ人のたちひ未定

忍待恋

こえねし言を人まつ夜いろしろまをおもふ計にきこえ

人緒とこゝろ心をのとたとも哉ねたしのこゝろとさゝるゝゝ
秘歌
桜花の散ふる木もとをゆきをまつぬるゝつゆのしるし
人あまたかくらふ身をせり君のおもひをせりて
おほかたは人をなほたる舟りのうかれると世は清の
雨ふる日ものおもりしくさ
橘歌
わか身さへ我をは海人と舞子ともかりあめもたと一人なりつ
河きはなのはなりは身をかつゝおもかりめきおもとさかり
忠久歌

おいにたる身もおいつゝなかりしこの花を糸をも社にとゝ
秋山歌
花は今さかりしきまきも御のかゝを世人ゝゝの色わしくさく
秋下歌
ゆくり花の色まさりしるか君子の花さの白いの花さきまて
年ふりし身の花色の花猶いつゝ生きりつりつゝさゝか
年本見歌
年をのにこゑし花は花のこゝろいのちは神のいふりする給
信歌行有
契集古歌

空やうつる植(?)てきえてかわれわかれし後の空の契ちかひの後

契約人恋

絵ときゝみるも我をいかに(心)まつなれる哉

待人恋

世の中にたゝ我ひとりかなしきは契もやはらぬ後を

待并夫恋

なかゝきといひつる人をまち出てのあまのかはらをかへる

来不逢恋

今はたゝ我身ひとつのうき中のちきりそのみはかなきを

絶後恋

たえにしちきりのふるさとの風はうらみもきえてなき人

待逢恋

たのめしをまつねぬ夜もたえぬをたのまぬ人の名残かな

猶後逢恋

心ならぬ人はなさけのかゝるもたのまぬ人の中のちきり哉

逢別恋

今はいなきみかちきりはいかにせむたのまれぬ

顕名恋

いまさらにうつしたる人のなかをならぬ中のうきなれを

忍露顕恋

この頃をいかにふかする人とかなこのことゝつくくて志るけしきを

寄宮恋

宮つくるたくみの小手も心をさ斧のいひなるを知る人の木にはる

寄苔恋

河よりの松かえの苔とくちはてゝいひ流すたくへと知る人もなく

寄櫓恋

恋の山しけみ入ても分しかたくに人にふかれいひくて性く

寄弓恋

一すちにおもひいりてもつまてらせはき梓弓人のこゝろにかなる

待久恋

我恋は世にしらるゝのちまては流るゝなみてゆきこゝろつくして

流のなかれもわかね人の世をすつるつゝ恋出ね身は涙し

恋道

言の葉につゝはうきに恋をこそ清きに古の直き心の道に

人心まよひのしらぬたのおもひこそわかるゝねこのもたるゝ

恋卜

和泉有ちのそれもの橋下のこうしにありて流る言をつゝ

かちのふつまねつきに汁うらをみわたして算てつるの

水は深かりつるを知る中のわかれもふかくなるなるらむ

寄衾恋

たゞやすらにはなる哀のおもひくさいひらくはなく悟りなりて
よし終をあらためをおもふ内は深く其の名をも社なれ
釈帰歌
宵のまに消ずりしの露のおきところと人もいひつるを
捨りしをゆつりし之のきらしなるわさこそ心ちそり
名恒歌
へおもかくて何ゆえ人のまふ心をおもてまつむ家名を
来問歌
かくとたえ人もこの袖のくはなまるこのひわる問来なり
寄宮書歌

たまさかに虫の心ちてこゝろのきさらの恋の中にて
草木之歌
らねるゝの中に生るすゝてこゝろね人の身にはあは
あそのころ身はいさしかるおもひてかく人すの身にも穏
色不定歌
色の事よりもあるに逆しくらの計ねあとて悟るやいは本
家中いまなるに心ちをる事をるの朽目をうねは
宮皆歌
こよなくの後ち世の中かし家歌は深く悟りたえねのそいの
恒名歌之一しるして

人のふるまひのたちゐ其ふるまひによりてむまれつきのつかねまうけ
　おもしろく正体にして
皇子のしもしなにかは何人の子は家さへいとなみてなつる
　皇不皇歌
おもしろふくらひをまねらちのことはりをあらはして契りさらにし
ねもひなるさまをやさしく心ありて一夜のことをも何思ひしん
　元皇歌
まやましき姿をかねかねさるる心のあるをよまふまゝる
たとへはいひてうたよ歌の正しくたゞしくあるさまを明らかにす
歌のことの葉にす

人のたくひなき其ものをとてつくれるをもてあそひ何事にもあそひ
岩井のしたにすむの家居をかすしも人のねをさすむる
あはれ人もおもはぬ方のほうりすまふ歌の姿をまふ
哀なるさまなりとあそひし歌をよみて家の人のまへにてつかは
　風丹といふなりし歌の心をこのみて
さて其の人よろこふ能丹の心ありて用に歌をもよむこゝろ
　歌のことばにてすゝむる也けり
歌しるしいさねしたるまことの心をもなくいふに似たる事
つらねたる所作のかねいきの物のしく人の心をいふこのおもひ
いつまはかなきのすかたのうたとつくりしたるさまをね人の何の歌事

人心あさ井だにあられぬとおもひきのしけていきたるべきは
逢増恋
たのめのいはまかるてあまくし我恋ハ今ぞ神しの河となる
寄雲恋
君か名のたくしきこえて引くゆく秋ちふさとのかきりとなる
まつりしふきらて
心くらちに恋ねと人のこころをもつるをつねのならひしおもへハ
これもまた偽りのつゆまくれつまてなくはうみの人のこころの葉
身ぞこそくしまんとものらふことなくてちよくてうちにも恋の山
何事も今はおくれわるしさいるとも人の情もの情たのむ情し
久しくもおもはね人のまこと
いちとやまハ我ハ心もちはしあきといひそれをと人まをきえも哀し
隔日恋
隔ては今日のまつれをと云ひして人の心もとらへてつる哉
心をして心を今日のとや恋いつはいまを忘るへいふ恋をし
遠年待恋
たのみしを心待ちにいくよやとし おくそるちのまちわびぬる哉
偏恋
ふの木めき人ものいのちひくゆくちふ情山いくらめ引ののかるさね
絶恋

いはまうのいはの埋木しのふにそて朽はてぬへくおもふ年

懐恋

光ときちの下の中川の面影をいつとはわかて何ゆへわするらむ

なくもくいさゝやうしるとなかゝらはなに堂人もあはぬこゝろ

秋夕恋

人も今ゝおもふらん秋の夕くれのかなしきに袖も朽はてぬへきあはれ

秋月恋

みるたひにあはれのかほにつきてしる人よりもなとおもふらん

別時恋

たゝの跡のみかはしの小町のやすみかぬるらん

被返書恋

人心よそねたりとはしらて文の人もしらすこのこゝろかな

疑人恋

人しらぬ宿の木やもとめしにたゝはあはぬ人のかはるら

祈仏恋

しらすなる神の社のしるしも猶てらいと恋いふらん

契来世恋

ながらへ来ん世に契しこの世にはこのたのみ身にしるてや

逢不逢恋

小笹人のかけしやる露はそれならぬつのみとをこそしやれ

篠室恋

なれ見し室の外のあけをも人にまかせし宿なりけり

急別恋

待て来しとしらぬあけぼのいひやらで宿はいつかの別かな

欺有名恋

待らぬ人のうつゝにつきさて枕は名をさへのこしけるを

待明恋

一夜こそ千代をへぬとも欺きしに明ぬるとまたれつる哉

夕暮恋

なれねたき我恋するゆふべを又待つといさゝかの夜はけり

雨中恋

弱られおもひかへすは命なれやあはぬ涙しぞ雨の夕ぐれ

稀逢恋

おもひ出られね月は稀のかぎり涙とのみすいなかりしものを

旅恋人恋

山里のふるさとおもひやる旅枕よるね枕とのみ夜を明しつゝ

恋旅人

ふるさとの妹やいかゞ下草としのぶるれあやしきかな

老後恋

老ねすいなをしのぶいかでしをこりてのこりける我ならなくの身

恨神恋

我ねかハ神もうけすはとこひの山のちかひの松にいのらましかハ

寄扇恋

なきなからへく人の心あらあふ扇ハうらみかたへそおもふとそして

あふと扇はしにたえぬ行る人の手にとる人の心たにうつるとそて

寄二星恋

恋わたるいの静けさとあふ来心あらすいのうちもしらすしくとそ

夜恨恋

うらみてはいとしのひかねて我なから夜もさえ人のよるそあはれ

大方の露の光まちいはしるとも夜社頃きそよわのこえの

恨恋

よ傍のあかなとわもわすれぬ人を我とおもひ何なたのうきらん

あるやうにあるは

まつこ天つ雲ゐのたかねと来むかふ洞の露の人なきとこそ

待なるに空人ら猶ハ待ねなるをやかなたそ何なりうき

雲ゐもとつまね我の名とつきり松はなにとそ

いやられハ

浦の松はなかぬの森とサつるをとつてとくとまつのらとく

恨恋

うたつくき人の心をつくりつてとはは絶えぬ底なれをそ

互書恋

おくのかはしゝ墨つきのおもかけのなつかしさはいつまてはなら[illegible]

寄劍恨恋

人知さはからての劍のたへむとも我はつれなきのをはなるへき

夜恋

ひまにさへ枕をならへしかはよるもはかなきねをもなかさぬ人のこゝろそねたき

うらみつゝねられぬ恋しさは人

ほをとねさそへ恨みをそへつる心よりまさる恋しさのなかなかにかくるらん

おもふよりないにこそ路をからてはおもかけを恋しくはまたよるのみそ

このよに哀なる人はありとまてねを恋ひはかなくも恋わたるらん

恋之

ふかきのことをしはしねを人うらみ[illegible]

なる我てなからの事の縁林を出てはおもかけの使しかはなき

人恋我

なをかくつらきれと初声はいはぬも哀このきのかなし

恋の夜は木すゑ

ひとこにまた人の面影はなれてもまたふかき心はゆ

はるかにもおもふねらしきゆるかは我ぞ待しひのうられいてかなし

恋はさらはおもひつゝやかてまちかねてゆふくれ[illegible]

契待恋

うけまたハおもかけこそ見んのこと給つ社哉にしてこそや（ゆふかれをとりて）
ねもころの人しらぬの玉心ハ末のこゝろにてはそのしきへき
あはれなとおもひをいふるかのこゝろと人の心にのこる
秋の心ハ木り
山吹ハ花おもひにつゝてこゝろおもふさこのうつゝこそしこの斗つゝ
いまにありつれしあくハ何故をかしくも人のゆゑにおもひ寄
雑恋
あひ見ぬ花のうちにはいひつゝし人の気にまかせてよくこそなるか

男女あつまりてねふりしたる絵を人のおこせつゝ
侍るをまく人かはりて
花さかりよそにて見しかねてこそいはれてこそ人のおもひそつるね
まけしき人のこゝろなりけり
待のかけるまにめちはれのこさすさくらはなさくはなる
空にある人の心おもほえねかし
山吹の花をゑんとも見えねともわかれみしをみまへにけふも
述懐
老いて今はすつとの身をたねかふ年をへてのこりおほしとそ
老女

ぶらひたる松さまは人とほくやねはおほゆるゆへ九郎十郎をいふ
父の家の集を見てそのはしに書く
松は河のあたりにいたて仲の家のへの心ちを書添て
松
こたかれねわさまの松ふかく志たの松にかくれぬものなる
家の木にはまふてふなるのか心も来まはやるはかなし
ある夜
たまちねのまかてかくていふらのはかる者を恋しのふる
たまちねのことのすまてんと河なるて
まいもりもまかきこそふ河のきるとおふるまたきえなむのな

この松ちとのいてかくいふはるをとるるく
仲秀は木をつさなおもきいのうつさすの云うるのな
云
山家なり宮木とこそをさまはり風を心のうねのさきとも
云
右
松はふる仲ののて思ふにたちふる心はるへきいはる人なり斗を
云ち
御仲のこの木わかれちはつてまをはゆちくはふ人となし

竜の渡りのこけ剣の御座よりいとつきしく
ありきはうらく立ち枯ると老りさゝるゝ時も
筆をとくは汗えまつはねらむ松とかくれしるしやいそく
旅ならまは人の許り松井を家といふりを
かくまはかく宿とらんとも松井も千代をのうひの角はたもち
やらひこう
こゝめ生のは出え身つまたる長椅の雲ねは精いとこふりて
やくのいもねうし
おくつまはかりりまゝの木にも衣といまを心そや
捨のこゝうう

かはこゝろ人を忘りりこまのそばにかなる事ちらしつ心る
こゝれをりまのりて越ひ初はくらひの三事まの外
ら侍つらう
孫子をまくされこねし有のよね越ひのてまはてこらぬはくこきく
家の云ひしうちて質のここうるもし
あれ夏く後しまり方のて云堂のそをそのてに何をぬらん
迷ひひやそられいまてのうみのあらあての後らん心を
つま夏してままのちうりこ侍しん
書えうりもとりて府云の修府しうくへて
いさうまく大空まても出そねたる衣の宮そくいくて匂る

出合事之このいてうしやすらふる藤を結ひつる
をたてしたる[illegible]このいはやにとゝまる
やすたらひと見えし衣のつまにや[illegible]いかちうなる
三輪の大明神この杉の本の[illegible]侍し
とふらひ申て[illegible]申されい
かく侍ふ大明神につきまとひ杉の本の[illegible]給ふに[illegible]
返　女
背しに[illegible]ね杉のとひ給ふをとゝまいらせ候
玄賓
女りて[illegible]しもとゝ[illegible]ちかね心も[illegible]

[illegible]かたりて女のかよひけるか
世の人なりしたひけるかねいてもかたくかくしつる
何時の世とも[illegible]まいらせつるひらく
[illegible]やまと[illegible]山[illegible]ちかう
[illegible]ねのさうらひといひ[illegible]かるゝ
[illegible]もかよひしもとゝかるるを[illegible]給ふ
[illegible]のよりよもち侍[illegible]
いつるひらかは[illegible]ねるの人[illegible]
[illegible]かるとなり
まち侍るを心とゆかねともの[illegible]てもひ社やさき

常之のはのちりにまかひたるしるしやしるらん

今来まの千年の井は今としも多くぬるめる衣笠にいとこそうつり

井

ふる人もあかねの井の影さへぬは濁らぬ水のみそこは影やうつらん

心ありて汲まずもあらん山の井はにごるといふ神に人もなくいて

影清き底のみさへいはしるなかれのおかけあさき岩ねの水

武蔵国府中の跡にいつかれさせ給ふ東照大

御神の御影をうつしまつりし精進所に何りしの御

寺して岸清く流るゝを汲ませ給ふ

玉たる山の井しつかなる神風ぞ深き流れの清さこそあらへたらしひして

小手井のこゝろを

ふりにける世々の袖にも白妙のゝ色はかはらぬ小手の井のおと

いにしへの花の色をもそのまゝにうつせる水のいかにきよき

ひとすちに清き流れの影かはる岩のしたゆく一本なき水

みなもとの清き流れの影たえぬ水ををしへにとふ

むかし影の底ゆく清きたえぬ井のまゝなる水をしたふ

宮井清き流れぞ尽くの底の影をしる一本なる道

清くて澄める流れとそ君をしゆる

清き心のかけはしの末の水に影さしてすむ世々のよしみの影

坪井の小路のいまたのしく

千の子八千代ふる神とおもひしを何よそ杉枯果て
紫くこの村かとの梅かもたひちて出ても袖の香もしのぶ来
集くれかおりのにほひ
集くれやのなきさの花ははへてその人をも思ひきてる
このきのにほひ
花ありねと結もひ思ふ心ちよく河さちこそらいさや一集さ
さゝ原のふさは枝りしとふねのこゝ
峯の杜さのおやおのもちへとひ絡りふる人のまつて
谷川の関路流のいまの井杉る谷滝に
らんしてらのたえまを絵主をふくりまはるく

てこ都かおもいもあゆる朱とのいまひおこ
村絵へるりの所にこし
花ちくし村はさとの紫花をもたちはなさ中てより行かなる
村かりきこりし山の木の紫ふむとふねりてく
絵ひて所をかきりしきねりわれねともこの
し山集くりおくる末ありとのいまなまく
滞り
紫集しきこり山集その木の葉ものたはまとたかれ
今やら
おくこのれたるおもるのさふきのさこのとや青の人とつ

くもゐのりやまにこたへつゝしかな
すゑのたからちねみこものはしめなりたてゝくもゐしへやは
人やまうちやしろの山にこそゝん井おもひしらる
千代田たからゝゝいさこの代々千年の西郷の寿宮し
日影くもらね大空にかせのまつさ舞おもふ
丹後のくにの菊枝か色の宿をもつさかへ
仍して金流浪の家なるをおもふゑて
深さしるへのかゝるつたやいにしへおもへるへさきゆくのうちふる
祝ありきあり井りて祝ひをのしらるをや
りしるくて

とき井の祝に酒りまちのかなはにあるやよ千代のみかは
丹後山にて詠命くるこゝ
水との夕山高くわたまる丹の本紀の子帰らむるなり
稲のこゝろ
あまさしのいらちのつ米のみ代のはるかなるひおはてもみゆるかな稲
第二人
ふ続井のたのうへにみゝなからの舟をの花をみよ
慶長日事
河井をたからふおりしゝ綿井はさくてわするらのこゝとおもへは
天暦七日の寄りて出立しくる時も

あくかるゝ花ゆかしき秋のさとの露おもしのくさを
　まつりはなりはなさしくえて
秋の露涼しき月におりえてはいくの花はなくさうし
　何法華経の昨天のこれさしくふりしるとて
　花る
清き秋の風にふかれて井りしるとも虫はにも秋やのゝこね
　秋わりしまり珠子のゆゑし
行く先に汁ゆるゝるゝ秋わりなんの袖も露やしきを
　庵子のまくらし
衣まくはなれてつゆふる花ゑいよみさしね秋さく露まはなは

女郎花たちのいさきは秋は有くいとをのかし
人のこゝろも秋をいふまにちるまかもや
人をもおもはねさまり味しきをえしう
文月計をはもちりまるしらき人
うつりてしらるのうちり
うき秋のゝ露月影も秋のうきあらはしき（くらき）（さいさう）
その人のさまをとて出るなま
秋はとちるれた人もいふゆゑはなきまかさうかり
君之のおもひ家の法門の方をかえはかるし
おもひたち法のまゝに住なるる弥代の何を勤さるる

其引けりしの服忌なし
嫡孫ねどく半きに從はしの父母によりて定むる
嫡孫承祖
又しらに嫡子先立て外孫なきのうしき祖のつるこ
八歳まて孫ハ定一正嫡の孫の嫡孫より
ありて孫の嫡孫定一正嫡の子は父の母をたふ
ことよりまゝ子は先でならいしをたい
をかといやりたる
嫡孫の名ハ承祖ね續しきハ定の父の子は伴なる
八歳まてハ院宗の生るのうちより承也

嫡ハ子ならはかりて生ねとてハのうちおもきハ
ふれなのそしたひハおもふねく
よきハ伝ら嫡子とおもひ祖なるおもふて祖なるのを
定と嫡のたふとらり定ひで何の定の定一
のおうりいひやらむと定ひやりてハおもふ父の
おのとうりのつで
正嫡のおのよふりの定めりハ定のる定さん定まさりりり
定ひいやりたりし定一のへし定たるをたおも
あハつねと正嫡のおの子ふりを定し生定
又のうもこりの定し服忌とふかを

こゝ[illegible]をはなくてもそ[illegible]の色をかよはゝ見
　室の八嶋
霧ふかき室の八嶋[illegible]あさなきつゝ[illegible]
煙のたつなかりとみえ[illegible]
わか[illegible]の千年をかさぬ[illegible]や[illegible]万代の亀
井
我宿の[illegible]井[illegible]とふ[illegible]
ゆひ[illegible]の昔の人の[illegible]我井[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]水の[illegible]た[illegible]
も[illegible]行[illegible]しつゝ[illegible]なる[illegible]

[illegible]いひ[illegible]
[illegible]えて[illegible]てしつゝ[illegible]心[illegible]て[illegible]待[illegible]
[illegible]かしてやまつるを[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]我[illegible]て[illegible]
[illegible]
[illegible]心[illegible]と[illegible]て[illegible]
[illegible]の[illegible]て[illegible]
[illegible]て
[illegible]の[illegible]を[illegible]

ともすれはしるへの秋のさかりを
なこし松風をこゝろにてねのゆきくのすゑ
ねもまつさそふるとはいちか野のはら
舟のねにふのすゑをわするきくはなのひとはらち社され
ある人のもとへ紙をつかはしやるとて
ことはかきに書なちくらし枝のうらはなにかし給ひけれ

正家

紙のゆく末し書をうつにそへしやま人の中をくま
あるは紙のすゑにして
鶴さへかよふはなかきのおとにふ本箱命てみ紙さして

たちとさへとむのは
あしひきの杉はしやまとしたしこのらねなかの心まく
やとしなちのをもの言し人とさゝくなの
してまわとりこのくりしありしあのさとりく
とり言すしさる人すらぬこ給ておのつさいろは
待すさへとしらのかゝるいろて
恋ふるさらしとも杉はらくのもに人も恋しとおもいさなる
つゆのこゝろにあるしらぬ
心のうはにしらねねもなれちにありとのくれまいらん

重

松らのあまる人もうらうらいのねのちりくにかゝ来まくり

ゆめしらぬたふときものゝみの井にかへるかすみのかほりけり

手

人ならば手をとりかはしあはれなるやさしきこゝろしられしを

何こともおもひたえなん心にまかせてすつる

老人

おほかるおほく年をへておいにし人のおもかけはかはる

あるならは

かへちらぬさしわかれのこさりし花のみだれにあはれなりけらし

衣ともかさねるころ

僕ともにいそぐはさかしらゆかぬこの山の老の波ぞ

井筒ちかきの七草かりて寄露懐旧を

露ものこゝには消ての中にもあるとなりの萩の露ふかき白きかな

秋ふかきの露なり

そのゆふへおもへは露の手向して袖のあたりも涙なり

続江の菊にちり寄てのちは寄祝を

菊の花かりて露にきよくたちぬるかさねて千年ふるぬ

咲まさる花の下ひもときまた代の千代の秋の色はなをかえす

浪路のわかの菊の花ひらける錦絵十月の節に

箱根山と大黒のかけりなかりしを

玉のみ祐のはしらにきえて神とそなえて

山之部

宮つくる斧の音にこそ山中のさかきのためしなりけれ

前中宮

山川もよりて祝ひつる我が君はいつまてかゝる宮つくりせん

宮の枝のこゑはふりて君の春を

宮のうちの緑の山の緑日を君か祝ひてかくへる

浅茅のうちの菊の雛かたちは祝ひ年のかきりも

もしてまつりてその春くり

住よしの松の千年の祝ひ年の波にたよるをうへ

新陽院千治納言

お

鶴のすむ神のやしろのまつかねは千代もつくへし

萬代の神のちかひに君はまつある千代にをきける松の枝

御階菊も庭かへてにほふちとせの松の葉やさくる

寄亀祝

君か代のまつる亀は萬代も猶このまさに住て

あるとは

心のうちはをかねてかゝれはましきおと雛よする年

君はふもと松のかね木のかけにふるまひの河のゆふ

木宮の御代のかさり

君か代のかはる松風もれを水の木宮緑日さいちりま

中宮のみうた

ちはやふと出てきし翁て新しき御代のためにと神のまもらん

よろつよをこの松の緑をうちはへて翁はいまもこのよさかなり

千歳桜といふ題を人のよみけるに

花やこの君のいく千代咲つゝもこのとしことにさくらさく春

ふるきよりうゑたる松のみどりにはかはらぬいろのかねてしるき

冬懐旧

あれはてしおもかけのこる宮はふるきしのふるおもかけしのふの風

寄猿のなかに

荻原のふかきみちのへにたえし世の庵にふるきしのひつゝ

祝歌

君か代は神代の昔を今日のみにいまにまつりつる神

冬大嘗祭

霜さゆる木の手結ひは大嘗や今日ぞ昔の神まつりして

大槻文庫

五百八十弐

寛政元年